

---

# あさきゆめみし

蒼山れい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あさきゆめみし

### 【Nコード】

N2086Q

### 【作者名】

蒼山れい

### 【あらすじ】

慶応三年、春。根雪の残る京都では、謎の辻斬りが横行していた。狙われるのは佐幕派の武士ばかり。人々は噂する『人斬り抜刀斎』の仕業に違いない、と。同じ頃、京都にひとりの少女が現れる。彼女という時を超えて投げこまれた小石は、歴史の水面にありえなかったはずの波紋を描きはじめる……。【抜刀斎×薫を前提にしたタイムスリップ・ラブファンタジー／現在改稿中につき、改稿前のバージョンのみ掲載しています】

## 一、闇夜の邂逅（前書き）

こちらは改稿前のバージョンとなっております。今後の更新は予定しておりません。ご了承ください。

## 一、闇夜の邂逅

息が苦しかった。

狭い路地に澱む闇のせい、それともむせ返るような血のにおいのせい。薫はただ、途切れ途切れの呼吸をくり返すことしかできなかった。

月のない晩だった。家々からはとうに灯<sup>ひ</sup>が絶え、街は眠りのなかにある。夜はいつそう暗く、深かった。

闇に塗り潰された視界は、かろうじて物の輪郭がぼんやりとわかる程度。それでも崩れた膝元に広がるぬめりと、そこに沈んだいくつもの人影　『彼ら』を見下ろすように立ち尽くす人が手にした刃の、瞬くような銀の光は捉えられた。

ぴちゃん、と水の跳ねる音がする。白刃の切っ先から滴る赤い雫を思い浮かべ、自分もあの刃に食われるのだろうかと考えた。

迷路のような路地をさまよった末に、あろうことか斬り合いの場面に遭遇してしまった。目隠しのような闇のなか、たったひとりを数人が囲んで。明らかに尋常な果たし合いではなかった。

多勢に無勢と思いきや、しかしそのたったひとりには袋の鼠ではなかった。稲妻よりも疾い閃光<sup>はや</sup>が幻のように駆け抜け、次々と絶叫や悲鳴が上がった。あたりはたちまち血臭に満ち、物言わぬ骸が勝者の足元に転がった。

薫は人家の壁に背を押しつけ、じっと息を殺していた。すべてが終わった直後に膝が砕け、もはや逃げることもできなかった。

夜陰に乗じての奇襲をしかけられる人間など、後ろ暗い何かを抱えているに決まっている。あれほどの手練れであるなら、とつくに薫の気配に気づいているだろう。始末されるのは時間の問題だった。剣心、と会いたくてたまらない人の名がこぼれた。恋しさとも悲しみともつかぬ想いとともに、熱い涙が膨れ上がる。

どうしてこんなことになってしまったのか。悩んでも悔やんでも

どうしようもない。ここに彼はいない。だれもいないのだ。

ぱしゃり、と再び水音が弾ける。

銀のきらめきが揺らめく。水音を立てて近づいてくる気配に、薫は目を閉じた。

溢れた涙が熱を失いながら頬を伝い落ちる感覚を最後に、彼女の意識はぷつりと途切れた。

気づいたら、暗闇のなかにいた。

まだ陽は沈みきらず、あたりは夕焼けの色に染まっていたはずなのに、いつの間にか足元さえ危うい闇に吞まれていた。見慣れた土手道の風景は消え、そこはつぎはぎのような家々の壁に挟まれた路地だった。

薫は混乱した。ぼうつとしているうちに時間が過ぎ、知らない道に迷いこんでしまったのか。だが激しい違和感があった。まるで自分を置き去りにして、すべてが一瞬で飛び去ってしまったような。

とにかく路地から抜け出そう。歩き続けていれば、いずれは大きな通りに出るかもしれない。そうすればどうにかなるはずだ。

家で待つ彼のことだけを考え、震えそうになる足を必死に動かした。だが行けども行けども静かな闇があるばかり。ようやく掴んだ人の気配に安堵したのも束の間、その先で待っていたのは、  
「……………」

浮かびかけた記憶を全霊で撥ね除け、薫は弾かれたように目を開けた。まぶしさが瞳を刺し、思わず顔を歪める。

全身に滲んだ汗と、それを吸ってまとわりつく冷たい衣。背中に感じる布団のやわらかさに眠っていたのだと知った。

光に慣れてきた目にまず映ったのは、木目の浮かんだ天井だった。ぎこちなく視線をめぐらす。閉めきられた襖戸、衝立、燭台、隅に

置かれた文机。床の間には山水画の描かれた掛軸がかかり、その下に花弁の艶やかな紅い椿が一輪、ささやかに飾られていた。

「……椿？」

匂い立つような花の色に釘づけになったまま、薫はぼかんと呟いた。なぜ今頃、椿が咲いているのだ。

だって、今は。

「……目が覚めたか」

驚愕に染まった思考は、戸の引かれる音とともに響いた声に遮られた。薫はハツとし、慌てて声の主を振り返る。

「剣」

心、と続くはずだった言葉は途中で切れた。

目を睜ったまま凍りついた薫は、今度こそ声を失った。

「どうした？」

鋭いまなざしに微かな怪訝を浮かべる若者は、間違いなく薫のよく知る彼だった。

だが、何かがおかしい。

いつもより高い位置で無造作に結われた赤い髪。朱色や藍に見慣れた目には暗すぎる黒衣。腰に差された太刀と、脇差。

何より、薫に向けられる口調が、表情が、雰囲気が違う。違いすぎる。

静寂と冷涼を纏う、この人は。

「あなた……だれ？」

薫は茫然と問いを洩らした。

そこにいたのは、この世から消えたはずの人斬り、緋村抜刀斎だった。

## 二、君知らず

あなたはだれ、という薫の誰何に、彼は素っ気なく「緋村だ」と答えた。

「ここは俺が世話になつてゐる宿だ。あんなところに放っておくわけにもいかなかったから、勝手に運ばせてもらった」

感情を窺ふことの難しい、淡々とした声音。剣心のやわらかな口調になじんだ耳には、ひどく突き放されたように聞こえた。

布団から上体を起こし、寝巻の肩に借りた上着を羽織った薫は、上げけの下でそつと拳を握った。目の前の彼は、自分のことを知らないのだ。

『ここ』は、いつたいどこ？

「助けてくれて、ありがとう」

震えそうになる声を叱咤し、ぎこちないながらも微笑んでみせる。戸口に腕を組んでもたれた彼は、なんの表情も返さなかった。

「あの……お訊きしたいんだけど、今は何年のいつ頃かしら？　ここは日本のどのあたり？」

「は？」

さすがに突拍子もない質問だと思つたのだらう。彼は胡乱げに目を眇めた。

「何言つてゐるんだ？　今は慶応三年の二月だらう。ここは京都だ」

薫は握りこんだ両手に更に力をこめた。

「慶応　三年」

薫がいたのは、明治十二年の十月。とうの昔に江戸から名を変えた、帝都・東京。

十二年もの歳月を遡り、過去へ迷いこんでしまったというのか。「うそ……」

そんな馬鹿げたことがあつてたまるか。これは夢だ。悪い夢だ。もしくは剣心の企んだ、たちの悪い冗談に決まつて　。

「いい加減にしろよ」

怒りのこもった冷たい声が、逃げ惑う薫の思考を引き裂いた。

「おかしいこと訊いたと思えば、今度は嘘だと？ そんなに現実を疑いたいなら、自分の目で確かめろ」

「えっ……」

乱暴な足取りで近づいてきた彼に腕を掴まれ、引き起こされる。

窓辺まで連れてこられると、彼は勢いよく障子戸を開け放った。

「よく見る。これがきみのいる千年王城だ」

薫は肩を震わせた。

窓の向こうに広がっていたのは、剣心とともに幾度となく訪れた京の街並みだった。まっすぐ走る路がいくつも交差し、家々の屋根は整然とした連なりを見せている。ひと際高いのは寺院のものだ。遠くには山影が青く霞み、ここが山々に囲まれた天然の要塞であることを知らしめていた。

視線を下ろせば、宿の前の通りを行き交う人々が見えた。彼らの出立ちは、普段薫が見慣れたものに比べてどこか古めかしい。月代さかやきに鬘を結った武士が当たり前のように帯刀している姿を認めた瞬間、薫の足が崩れ落ちた。

「おい？」

慌てたような彼の声が遠く聞こえる。喉の奥からこみ上げてきた嗚咽に大きく体を震わせ、薫は両手で顔を覆った。

窓から吹きこんでくる風が上着の滑り落ちた肩を撫でる。それは乾いた秋風ではなく、ぬるく湿った冬の終わりの風だった。

「……気が済んだか？」

ようよう顔を上げると、むすっと顔をしかめた彼と目が合った。

それは見た目相応の、ひどく子どもじみた表情で、薫はちよつと笑ってしまった。すかさず睨まれる。

「ご、ごめんなさい。もう大丈夫。……ねえ、あなたいくつ？」

「……………今年で十八」

彼は不機嫌ながらも律儀に答えてくれた。わずかに覗く優しさに、胸の奥がきゅうと締めつけられる。

ああ、やはり。彼は彼なのだ。

いつの時代も、その根底に秘めたものは変わらない。薫が恋し、愛したその心は。

名前を呼んですがりつきたい。その腕で抱きしめて、好きなだけ泣かせてほしい。溢れる衝動に、薫は唇を噛んだ。

たとえば彼が彼であっても、彼はまだ薫が剣心と呼ぶべき人ではない。その心に触れるべきときは今ではない。

「わたしと同じ、ね」

薫は、十八歳の剣心を知らないのだから。

「助けてくれて、本当にありがとう。あのことはだれにも言わないわ。迷惑をかけてしまったけど、すぐにお暇するから」

目の縁に溜まった涙を拭いながら笑ってみせると、なぜか彼は動揺めいた色を見せた。立ち上がりかけた薫の手首を掴む。

「ちよつと待て。行くあてはあるのか？」

「……………それは、……………」

「きみ、京の人間じゃないだろう。もしかして……………人さらに遭ったのか？」

さらわれた。

そうなのかもしれない。何に、かはわからぬが。

沈黙を肯定と受け取ったのか、彼は表情を陰しくさせた。

「家はどこだ？」

「……………江戸」

嘘ではない。この時代にも神谷家はあるはずだ。そこには父と祖父と　六歳の自分がいる。

「でも、帰れない」

行き場なんてどこにもなかった。自分はこの時代にいるはずのな

い、異質な存在なのだから。

「帰りたくないのか」

「そうじゃないわ！ 今すぐにだって帰りたい。でも、帰れないの」  
止まったはずの涙が再びこみ上げてくる。薫はくしゃくしゃに顔を歪めた。

「帰り方がわからない……」

時を超える方法など知らない。なぜ自分が過去に飛ばされたのかもわからぬというのに。

もはや泣き声すら出せない薫の手首を、彼はきつく握りしめた。

「 だったら」

痛みすら覚えるその強さに、薫は思わずしゃくりを呑みこむ。どうしてそんな苦しそうな目で見つめてくるのか。

「 だったら、ここにいればいい」

「……え」

「行くあてができるまで、ここで暮らせばいい。宿の仕事だったらいくらでもあるだろ」

「でも、そんな」

彼と一緒にいるべきではない。すぐに離れなければ。警鐘のようにそんな思いがとどろく。

だが薫は 彼の手を、振り払えなかった。

「きみの名前は？」

「……………薫」

強張ったような彼の瞳を見つめ返す。その瞬間、動き出すはずのなかった運命の歯車が回りはじめた音を、薫は聞いた。

「神谷、薫よ。……………緋村くん」

### 三、日々を紡いで

「……まずい」

ぼそりと呟かれた言葉に、薫はぎくりと肩を強張らせた。

鮭の塩焼きをひと口食べた緋村は、難しい顔でこんがりと焼けた鮭を睨んでいる。彼は確かめるようにもうひと口箸を運んだ。

「甘い」

薫はがつくりと頂垂れた。

「ご、ごめんなさい。お塩とお砂糖、間違えたみたい……」

緋村の前に置かれた膳は、女将に頼まれて薫が用意した彼の夜食だった。慎重に慎重を重ねて作ったつもりだったが、調味料を間違えるなんて初歩的なつまずきだ。

ここ一年の間に、剣心に教わってだいぶ改善されたと思っているのだが。

「すぐに新しいもの持ってくるから」

膳を下げようとすると、緋村はそれを拒むように箸を進めた。

「ねえ、あの」

「これでいい」

「で、でも」

「食べられないわけじゃねえし、もったいないだろ。ご飯も味噌汁も卵焼きも普通だ」

おいしいとは言ってもらえない事実に切なくなる。それでももぐもぐ食べ続ける緋村に、薫はほろ苦い喜びを噛みしめた。

「ごちそうさま」

ついに膳はからっぽになった。箸を置いた緋村へ、薫は淹れておいた茶を渡した。

「ごめんね。……ありがとう」

「別に」

受け取った茶に口をつけながら、緋村はぶつきらぼくに訊いた。

「料理、苦手なのか」

「……これでもだいぶよくなったんだけど」

薫は俯きがちにため息をついた。ここまでがんばっても料理上手にはほど遠い普通の域だ。自分の才能のなさに泣きたくなる。

好きな男よりも料理が下手なんて、女として情けないではないか。「裁縫は得意なんだけどね。というか、それくらいしかできることがないんだけど……」

物心ついたときには木刀を振り回していた。早くに母を亡くし、男所帯で育ったせい、薫は女らしい習い事などひとつもやったことがない。

こんなお転婆を貰ってくれるようなやつはいるのかねえと、呆れたように苦笑していた祖父と父を思い出す。

「裁縫ができるなら、繕ってもらいたいものがあるんだけど」

「え？」

ばさりと広げられた着物に薫はぱちと目を瞬かせた。右袖の袂のあたりがひと筋、ざっくりと大きく切れていた。刃物で断つたとひと目でわかるきれいな切り口だ。

思わず顔を上げると、緋村は素知らぬ顔で茶を飲んでいた。

「大したことはない。袖を斬られたただけだ」

本当になんでもないような口ぶりで言われ、薫はそれ以上何も訊けなかった。黙って着物をたたみ直す。

「……いいわ。直しておくから」

「ああ、頼む」

空になった湯呑みを置くと、緋村は横に置いてあった刀を手にとった。

「しばらく寝むから、いつもの時間に起こしてくれ」

「わかったわ。おやすみなさい」

空の膳と着物を持って部屋をあとにする。襖戸を閉めた途端、重いため息が洩れた。

あれから一週間。

薫は緋村の紹介で、彼が世話になっている宿で住みこみで働いている。ちょうど女中がひとり辞めてしまい、代わりを探していたらしい。

面倒見のよい初老の女将は、『人さらいに遭って売り飛ばされそうになったところを、命からがら逃げてきた。路銀もないので故郷に帰れない』という薫の身の上話に涙ぐむほど同情してくれた。他の同僚も概ね好意的で、まだまだ不慣れな新米を叱り飛ばすでもなく、親身になって仕事を教えてくれる。

宿には緋村の他にも、何人か若い侍が厄介になっているようだった。緋村は「仕事仲間だ」とだけ言っていたが、彼らが維新志士そのなかでも長州派に属する者たちであることは察せられた。

緋村が自分の正体について明言したことはない。だが今夜のように夜更け近くに帰ってきたり、血のにおいを漂わせていたりすることは少なくなかった。志士たちの物々しい話し合いの声が聞こえてしまったこともある。

緋村たちについて詮索することは、宿で働く者たちの間では暗黙のうちに禁じられていた。薫たちの役目は彼らに快適な衣食住を提供することであり、それ以上はない。

薫も同僚たちに倣い、物言わぬ貝であり続けている。ただでさえ彼女は、人斬り抜刀斎の暗殺未遂現場の目撃者であり、まだまだ得体の知れぬ新参者という危うい立場だ。自ら首を差し出すような真似はしたくない。

なるべく日々を平穏に過ごし、十二年後へ帰る術を見つ<sup>すべ</sup>けること。それが今の薫にとって最も重要で優先すべき使命だ。

そのはず、なのに。

「あら、薫ちゃん。緋村さんはお寝みになられたの？」

台所に戻ると、明日の仕こみを終えたらしい女将と鉢合せた。

薫は膳を片づけながら頷く。

「はい。いつもの時間に起こしてほしいとのことですよ」

「そう、ありがとう。薫ちゃんも遅くまでご苦労様。明日はお休み

だから、今夜はゆっくり寝んでちょうだい」

「ありがとうございます。でも、いいんですか？」

「いいのいいの。一週間働きっ放しだったじゃない。休まないと体がまいっちゃうわ」

女将はころころと笑ったが、ふと薫が脇に抱えた着物に目を留めた。

「あら、その着物……」

「緋村さんに頼まれたんです。袖を……切ってしまったので繕ってくれて」

一瞬言葉に迷った薫に、女将は表情を曇らせた。そつと目を伏せる。

「そつ……」

彼女も気づいたのだろう。薫は唇を引き結んだ。  
どうしようもないことが齒痒くて堪らなかった。

緋村は現在、仲間を敵の刃から守る遊撃剣士の任に就いている。  
最も血を浴び、最も死の脅威に晒される危険な役目だ。

最強と呼ばれる剣の使い手である彼以上にふさわしい人はいない。  
その剣技の確かさを、何より、人斬りの烙印を押されながらも新時代を切り拓いた強い覚悟を、だれよりも薫が知っている。

だが、それでも 心配でしょうがないのだ。

夜の闇にその後ろ姿を見送るたび、どうか無事に帰ってくるよう  
祈らずにはいられない。待っている間、ひどい怪我をしていないかと不安ばかりが募る。

そして、彼に対して何もできないことが悔しい。悲しい。

間違いなく、それは緋村への情だった。

未来を想うならば抱くべきではないもの。わかっているのに捨てられない。

「こういう時世だから、あの人たちみたいな存在が必要なのかもしれないけど……ね」

女将は小さくため息をこぼすと、目尻の皺を寄せて笑った。

「わたしたちはこんな風に、ご飯を作ったり着物を繕うことしかできなけれど　だからこそ薫ちゃん、緋村さんのこと気にかけていてあげてね」

「……………はい」

女将の優しい笑顔に、薫はためらいながらも頷いた。

また少し、十二年後の剣心が遠ざかってしまったような気がした。

#### 四、花の残影

青い空はぼんやりと潤みを帯び、春の気配をほのかに感じさせた。それでも陽射しのぬくもりよりも風の冷たさのほうがまだ強く、薫は肩かけをしつかりと体に巻きつけた。

「うっ、寒うい」

「だったら出かけなきゃいいだろうに」

なんとも癪に障る言葉に、思わず眉を吊り上げて振り返る。視線の先では、襟巻きに首を埋めた緋村が白い息をこぼしていた。

「文句があるならついてこなくていいって、さっきから言ってるでしょ。宿に戻って火鉢にでも当たってればいいじゃない」

「そうしたいところだけど、あいにく女将から頼まれたんでね」

寒さを避けるためか、緋村は着物の袖の中に両手を引っこめていた。見慣れた仕種に、胸の奥が小さく痛む。薫はごまかすように語気を強めた。

「買いものに行くだけだから大丈夫よっ」

「きみ、店がどこにあるのか知ってるのか？」

ぐつと反論に詰まる。緋村は肩を竦めると、さつさと歩き出した。

「ちよ、ちよっと！」

「何を買うんだ？」

「え……着替えとか、小間物とか」

慌てて追いかけると、彼はわずかに歩調をゆるめた。意地悪なくせに　やはり優しい。

「宿のものがあるんじゃないのか」

「いつまでも借りてるわけにもいかないでしょ。自分で用意できるものは揃えなくちゃ」

隣に並んだ薫に、緋村は目を眇めた。視線が絡みそうになる寸前、するりと前方に戻ってしまう。

「何？」

「別に　小間物屋はこつちだ」

表情の薄い横顔に置いてけぼりを食らった気分になる。薫はこっそりため息をついた。

緋村が自分のことをどう思っているのか、よくわからない。

この一週間、彼の笑った顔など見たことがない。常に淡々とした、ともすれば冷ややかに映る態度ばかり取っている。先ほどのように嫌味ったらしい口をきくこともあり、正直好かれていたとは考えにくい。

だが、端々に覗くあたたかな気遣いを、なんと説明すればいいのだろう。

気まぐれというにはあまりに細やかで、薫の心が沈みかけるたびに掬い上げてくれる。突き放されてなどいない。緋村の手は、いつでも差しのべられる距離に留まっていた。

だが彼の瞳はあまりに深く、薫はそこに映る自分の姿を見つけられずにいた。

あなたの目に、わたしはどんな風に見えているの。　あなたはだれを見ているの。

こんなにも近くににいるのに遠いまなざしを目にするたびに、薫はひとりの女性を思い出さずにはいらなかった。

雪代巴　いや、緋村巴。

剣心がはじめて愛した娘であり、彼がその手で殺めてしまった妻。かつて剣心自身が語ってくれた悲劇が起こったのは、『今』から三年前のはずだ。十八歳の剣心は、白い雪が赤く染まった記憶に囚われたまま。

……だからどうしたというのだろう。

隣にいる剣心に　緋村にしてやれることなど、薫には何もない。それ以前に決して手を出してはならないのだ。あれほど苦しみ抜き、それでも唯一の答えを選び取った姿を目にしていればこそ。

だからこんな焦燥を覚えるのは間違っている。  
わたしを見て、なんて。

ぎゅつと眉間を引き絞った薫は、こみ上げてくる苦い思いを無理やり嚥下した。固く固く蓋をしてしまうのだ。溢れ出す前に、手遅れになる前に。

「おい」

ふつと耳元に落ちてきたささやきに、心臓が跳ね上がる。ひどく真剣な顔が見開いた両目いっぱい飛びこんできた。

「な、なに」

「つけられてる」

「え……」

抑えられた声量が緋村の緊張を語っていた。茫然とする薫の片手をさらい、彼はひと言。

「走るぞ」

「ちょ　きゃあ！」

腕を引つ張られ、薫は転ぶように駆け出した。ふたりが歩いてきた路は大きく、人通りが多い。緋村は迷わず雑踏のなかに逃げこんだ。

「ま、待って、緋村くん！」

「手を放すなよ！」

通行人にぶつかりながらも緋村の足は止まらなかった。ぎゅつと手を握られた薫は小さく息を吸いこみ、彼の手を強く握り返した。

どれほど走っただろうか。やがて大通りを抜けると、緋村は細い路地に駆けこんだ。人家の陰から大通りのほうを窺う。

「……撒けた、か？」

追手が現れないことを確認し、ふたりは揃って安堵の息を吐いた。ようやく呼吸を整えることができた薫は、はたとつながれたままの手に気づいた。

途端に首筋から熱がのぼってくる。

「緋、村くん」

「なんだ」

「手……」

怪訝そつなまなざしが固く握り合つた手に向けられる。一瞬の間のあと、緋村は弾かれたように目を見開いた。

「っ」

彼はぱつと手を振り払うと、逃げるように視線を背けた。

「まだ追つ手がいるかもしれないから、違う道を通つて帰るぞ」

「う、うん」

告げるや否や、緋村は足早に歩き出した。薫はその背に従いながら、まだ彼のぬくもりが残る掌をそつと握りしめた。

前を向いてしまう寸前、垣間見えた青年の頬は微かに赤く染まっていた。決して幻などではない事実に、甘い喜びと苦い罪悪感がこみ上げてくる。

剣心、剣心、剣心。

言い訳のように十二年後の彼を呼び続けても、とつくに走り出してしまった想いから目を逸らすことはできなかった。

## 五、恋つる夢

春はゆつくりと、確実に深まりつつあった。

竹箒を動かす手を止め、薫は前髪の生え際に滲んだ汗を拭った。高くのぼった陽の足元で体を動かしていると、うつすらとだが汗ばむような陽気だった。通行人の装いも、この時代へやってきたばかりの頃に比べて身軽なものに変わっていた。

「……もうすぐ、ひと月」

あいかわらず椿は咲いているが、それ以外の花も競うように綻び出していた。同僚たちの間では、もっぱら花見の話題で持ちきりである。

未来でも同じ分だけ時間が過ぎているならば、季節は冬を迎えているはずだった。剣心は、風邪を引いていないだろうか。

薫はぎゅっと竹箒を握りしめた。いつまでも帰らぬ自分に、彼は何を思っているのだろう。心配しているのか、……それとも。

緋村剣心という人間は、一度『死んだ』。

巴の弟であり、剣心に深い憎悪を抱いていた雪代縁との闘いのなかで、薫は死を偽装されて敵の手に落ちた。名医である恵すら欺いた『薫』の亡骸を目にした剣心は、その心を、破壊された。

この世の掃溜めといわれる落人群で見つかったとき、剣心はまさしく生ける屍に成り果てていた。まるで奈落の底を垣間見たようなぞつとするほど暗く虚ろな目をしていたという。

薫は、剣心にとってそれほどの存在なのだ。薫にとっても彼がそうであるように。

「大丈夫」

だが剣心は、『薫』の死を乗り越え、そして半生を懸けて求め続けてきた答えを得た。揺るぎない、唯一にして絶対の強さを。だからきつと　大丈夫だ。

「だから、わたしも帰らなくちゃ」

柄を握る拳に額を押し当て、薫は言い聞かせるように呟いた。剣心を信じているならば、帰りたいと望み続けるのだ。

本当に愛している人を、裏切ってはならない。

「……いつまで箒にしがみついてるんだ？」

すっかり聞き慣れた呆れたような声に、薫は我に返った。顔を上げると、あいかわらず黒装束の緋村が予想どおりの表情で立っていた。

「宿の前でそんなことしてると、せつかくのお客が逃げるぞ」

「べ、別にあやしいことなんてしてないわよ！　ちよっと考え事をしてたの」

「どうせ昨夜の夜食の反省でもしてたんだろ。卵焼きが半分炭になつてたもんな」

「炭ってほどじゃなかったでしょうが！　そうじゃなくてっ……」

薫は飛び出した言葉をとっさに呑みこんだ。緋村の目が怪訝そうに細められる。

「そうじゃなくて？」

「………もう、春だなんて」

「………ああ」

わずかに視線を逸らした薫に、緋村の返した声は平坦だった。

「そういえば、女中たちが花見がどうのって言ってたな」

「京都って桜も有名よね。きつとすごい盛り上がりなんですよ」

「そうだな……もう何年も花見なんてしてないから、わからないけど」

ふっと口調が遠くなる。緋村は何かを考えこむように黙りこんだ。居心地が悪くなり、薫はごまかすように掃除を再開した。しかし、またすぐに手を止めてしまう。

だれかに見られている。

氷の針で突き刺されるような視線を感じた。息を潜め、じつとこちらを凝視している。思わず振り向いた先、通りを挟んだ向かい側の建物の壁に張りつく人影があった。

年の頃は三十代半ばほどの、浪人風の男だった。目が合った瞬間、ぱつと身を翻して建物の陰に消えてしまった。

「緋村くん、今」

慌てて緋村に声をかけると、すでに彼の瞳は男が走り去った方向を険しく見据えていた。

「……この間つけてきたやつみたいだな。どうにかして、ここを嗅ぎ当てたらしい」

「だ、大丈夫なの？」

「まだわからない」

緋村は薫を振り返ると、緊張した顔つきで言った。

「女将に、とうぶん宿の連中の外出を控えさせるように言ってくれ。もしも必要があるときには、俺たちのだれかに声をかけるように」

「わかったわ」

「特に、きみは絶対に外へ出るな。今日みたいに宿の前にいることも駄目だ」

「えっ……」

薫は戸惑いに双眸を瞬かせた。

「どうして」

「さつき顔を見られてる。それに忘れたのか？ きみは、俺が闇討ちをしかけられたところに遭遇してるんだぞ」

声をひそめた分、鋭い緋村の言葉に、さあっと顔から血の気が引いた。

「あのときの……？」

「それほど日が経ってないことを考えれば、おかしくはない。きっと仲間だろう。もしかしたら生き残りがいて、きみのことを伝えたのかもしれない……」

緋村はきつく唇を噛んだ。まだ少年らしさを多分に残した面おもてに、自責の色が滲む。

「やつらを完全に仕留めきれなかった、俺の責任だ。だから きみは、俺が守る」

どくんっ、と心臓が大きく震えた。

沸き起こった熱は、しかし胸を満たす間もなく冷えていく。悲しみに似た切なさがじわじわと沁みこんできた。

違う。

本当にほしい言葉は、想いは、それではない。

泣きそうになって、薫はぎゅっと目を瞑った。

目の前にいる彼はまぎれもなく剣心なのに、その名で呼べぬ苦しさ。同じだからこそ、どうしようもないとわかっていても求めてしまっ。

これが裏切りならば、とづくに自分は未来の彼を裏切っている。

何度目を背けても、そのたびに突きつけられる真実。狂おしいほどの痛みを孕み、胸の最奥に根づいた想い。

自分はいっだって、たったひとりに焦がれている。恋の闇に盲た瞳に映る、その人に。

「……どうした？」

水気を帯びた視界を開くと、気遣わしげな表情が待っていた。薫は息を吸いこみ、小さく微笑んだ。

涙に溶けてしまいそうな、あえかな笑みだった。

「やっぱり…… 緋村くんって、優しいね」

緋村は虚を衝かれたように目を睨り、すぐにむすりと顔をしかめた。

「とにかく、このまま宿の中に戻れ」

そのまま通りへ足を向けた緋村の袖を、とつさに掴んだ。

「どこへ行くの？」

「上役に呼ばれてる。帰りは夜だ。…… 放せ」

不機嫌そうな声は、だが拗ねた子どものものとよく似ている。彼がこちらを向かない理由を言い訳にして、薫はほんの少し、自分にわがまを許した。

「今夜は、もっとうまく夜食を作るから」

待っているとは言わない。しかし、緋村には充分伝わったようだった。

「……行ってくる」

わざとらしいほど素っ気ない声音が、感情の揺らぎを何より示していた。

薫は袖を掴む手に力をこめ、頬を紅潮させながら応えた。

「いつてらっしゃい」

するりと黒衣の袖が掌からすり抜けていく。だが残ったのは、ほろ苦くも甘い喜びだった。

緋村の背はあつという間に通りの向こうに小さくなっていった。

薫は空いた掌をそっと握りしめ、唇を寄せた。

どうか、今だけでかまわない。

この幸福を、夢見ていたかった。

## 六、来るべきもの

夜半を過ぎた頃、緋村はようやく帰ってきた。ただし、思わぬ来客を連れて。

「はじめまして。きみが神谷薫くんだね？」

仏頂面の緋村の横で微笑む人物に、薫は目を丸くするしかなかった。

三十代半ばほどの、穏やかな笑顔がよく似合う男だった。しかし切れ長な双眸は、冷徹なまなざしで以て薫を見つめている。

「私は緋村の上役で、桂という者だ。緋村からきみの話を聞いて、一度挨拶しておこうと思ってね」

男の名に、薫は思わず声を上げそうになった。

桂　桂小五郎。長州派維新志士の筆頭であり、明治という新時代を築き上げた立役者のひとり。

幕末の動乱の中心人物、この国の歴史を塗り替えた男が、今の目の前にいるのだ。

「はっ、はじめまして。神谷薫と申します」

弾かれたように頭を下げた薫に、桂は目を細めた。

「きみの事情は、だいたい緋村から聞いているよ。大変だったね」

「いえ……」

ちらりと横目で緋村を窺うと、あいかわらずふてくされきつた様子だった。どうやら、薫を桂と引き合わせたことは不本意であるらしい。

「神谷くんは江戸の出身なのかい？」

「はい。父が、剣術道場の師範を」

「そうか。私も若い頃、江戸で剣を学んでね。今ではすっかりなまくらになってしまったが」

桂は苦笑し、横に置いた太刀の柄を撫でた。

「もう何年になるかな。この『仕事』をはじめたときに、二度と剣

を抜かないと誓ったんだ」

緋村の表情が変わった。薫は、桂の言葉にこめられた意味をくぐりと呑みこんだ。

「あの……わたしに、なんのご用でしょうか」

桂の口元から笑みが引く。彼は太刀の柄に触れていた手をゆっくり膝の上に戻した。

「きみは、緋村が 私たちが何をしているのか……何をしようとしているか、どこまで知っているのかな」

薫は息を吸いこんだ。

「……女将さんたちが知っている程度には、理解しているつもりです」

「そうか」

静かに呟く桂に、自分と同じくらい緋村が緊張している気配が伝わってくる。まるで庇われているような気がするのは、間違いだろうか。

「では、緋村が刺客を放たれるような立場にある意味も、わかっているね？」

「はい」

緋村がいる、と思うと、まっすぐに桂を見て頷くことができた。少なくとも、薫はひとりではない。

桂は腕を組むと、思案するように眉根を寄せた。

「と、なると……これはもうすでに巻きこんでしまっているな」

「桂さん」

とうとう緋村が口を開いた。

「いったい、彼女に何を教えるつもりなんですか」

「神谷くんの置かれている状況についてだよ」

緋村の目が見開かれ、鋭い怒りが閃く。

「桂さん！」

「緋村、もう彼女はお客様では済まされない。当事者なんだ」

桂の口調は変わらず静かだった。

「長州派の志士が出入りしている宿の女中だとわかった時点で、神谷くんは暗殺未遂現場の目撃者ではなく、我々の協力者だと見なされている。そもそもあそこにいたこと自体、偶然ではないとやつらは思っているだろう」

「……ッ」

ぎり、と緋村の歯が軋んだ。血の気が引くほど握りしめられた拳が、小さく震えている。

桂の視線が再びこちらを向く。

「神谷くん」

「は、はい」

「単刀直入に言おう。京から離れて、身を隠してもらえないだろうか」

一瞬。

なんと言われたのか、わからなかった。

「え……」

「きみは命を狙われている。きみがここにいと、とても危険なんだ。きみだけでなく、きみの周囲の人間も」

どくり、と鼓動が波打った。

悪寒がこみ上げてくる。もう冬は過ぎ去ったというのに、吐息すら凍えてしまいそうだった。

「わ、たし……」

「本当に申し訳ない。だが、それが考えうる最善の策なんだ。故郷へ帰すことはできないが、きみの安全は必ず守ると約束しよう」

京を離れる。

ここにいらなくなる。

緋村の、そばに。

ダンッ！ と激しく畳が殴りつけられた。

「……緋村」

無言で拳を振り下ろした青年を、桂は険しい声で呼んだ。緋村は燃え上がるようなまなざしを返し、太刀を掴んで立ち上がった。

「緋村くん！」

薫は緋村のあとを追いかけてようとしたが、深く沈むようなため息に引き留められた。

「やれやれ……これは重症だな」

目が合うと、桂は困ったように微笑んでみせた。それは思いがけず優しい表情だった。

「神谷くん。きみは私が考えていた以上に、あいつの心を捕らえているらしい」

薫は小さく息を呑んだ。

「わたし、が？」

「ただ、それがきみ個人へ向けたもののか……あるいは、だれかの面影を重ねているのかは、正直わからないが」

もう一度、心臓が跳ね上がった。

茫然とする薫に、桂はそつと目を伏せた。

「きみに、聞いてもらいたい話があるんだ」

昔話をしようと、彼は言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2086q/>

---

あさきゆめみし

2011年3月30日21時40分発行